

研修報告書

北里大学大学院医療系研究科

余語克紀

2013年5月20日-31日の日程で、University of Texas MD Anderson Cancer Center（以下、MDACC と省略、米国テキサス州ヒューストン）で見学を主体とした研修をしてきましたので報告します。志望の動機は、米国の医学物理士が臨床でどのような仕事をしているのか、自分の目で確認したいと思ったからです。

研修は、Gillin 教授のもとで医学物理士の臨床業務を中心に行いました。Main building では、最新機 TrueBeam での骨転移治療、肺がんの SBRT、計画 CT 撮影、治療計画作成、治療機 QA (monthly, annual)、患者 QA、治療開始前および週間のチャートチェックなどを見学しました。Mays Clinic ではおもに小線源治療、Proton center では陽子線治療の見学も行いました。また、Komaki 教授のご配慮で、医師のカンファレンス、診察を見学させていただく機会にも恵まれました。

MDACC での物理士の仕事は、まず放射線治療全体が円滑に進むようにマネージメントすることだと教わりました。医師、ドシメトリスト、技師などの他職種の間をつなぎ、全体を見渡す役割です。「go everything smoothly」と表現していたのが印象的でした。また、物理士の役割は、新しい技術の受け入れに際して先頭に立ち、咀嚼して臨床現場に還元することだと教わりました。ルーチン化された部分は、驚くほど分業化され、ドシメトリスト等の他職種に任されていました。つねに新しい技術と医療の間を橋渡しする役割に、理工系出身の物理士として、自分の存在意義があるかもしれないと感じました。

米国では、臨床現場で物理士が専門職として受け入れられており、率直に大変うらやましく感じました。米国の物理士は、治療法が危険だと感じたときは、医師へ忠告する義務があるそうです。医学物理士の位置づけがあいまいな日本と違う点と感じました。TrueBeam での骨転移治療では、物理士が患者さんと接する機会があり、患者さんを寝台から降ろす時、Therapist（～技師）と共に両側から患者さんを支えていました。今後、日本の技師と物理士の関係を考える上で印象的でした。

QA はシステム化され、ごく当たり前のことをしっかりとやっていると感じました。QA 項目や技術的レベルには日本と大差がないように見えたが、考え方は違うように感じました。とくに QA の結果を他人へ説明して評価を受け、

人為的なミスは起きるという前提に立ち、誰もが自由にものを言える雰囲気になっている点などです。

以上、短い時間の中で一側面を見ただけかもしれませんが、米国の臨床現場の「雰囲気」を経験できたことが何より大きな財産だと思います。MDACCの方々、しっかりと主張をすると驚くくらいに親切で、ホスピタリティに感心しました。何度かアポイントもなく突然の見学をお願いしたこともありましたが、大変丁寧にできる限りこちらの要望に応じていただきまして感謝しています。がん撲滅のためには、研修や教育も使命のひとつと考えているようでした。

今回の研修では、**Prof. Gillin, Prof. Komaki, Prof. Hayakawa, Dr. Suzuki, Dr. Dobashi, Dr. Miyamoto** はじめ大変大勢の方にお世話になりました。すべての方のお名前をあげることはできませんが、心より御礼申し上げます。最後に、ご支援いただきました日本医学物理士認定機構に深く感謝申し上げます。